

ダダイズムとモダンアートの「反転」 —ツァラ、デュシャン、荒川修作、ボードリヤール—

塚原史（早稲田大学會津八一記念博物館館長）

***モダンアート Modern Art の両義性**=①古代→中世→近代・歴史性（通時的）：産業革命（都市と工場）と市民革命（個人と理性）によって成立した西欧型近代社会に特徴的な芸術としての「近代芸術」（フランスでは19世紀初頭以降ベル・エポックまで）②同時代性・現代性（共時的）：①の近代性の展開過程で現代(le temps moderne)に繋がる「モダンアート」（フランスでは1863年「落選展」～1874年第一回「印象派展」以降、キュビズム等へ接続）⇒今回は①から②への展開の「反転」を考察する

*Relation of the social change to the evolution of art in the modern era（近代の社会の変化と芸術の発展の関係）

1/The birth of modernism and modern art can be traced to the Industrial Revolution...MoMA collects work made after 1880, when the atmosphere was ripe for avant-garde artists to take their work in new, surprising, and modern directions. (*MoMA Learning* 2018) 2/Nevertheless, economic facts and social movements can only have an indirect relation to the stylistic evolution of art. (Herbert Read, *The Philosophy of Modern Art* 1952)

***モダンアートの反転：**

最初の反転=社会構築のアヴァンギャルド（前衛）から「現実」の（基本要素への）解体へ（ロマン主義・写実主義→キュビズム）

「アヴァンギャルド芸術家」Artistes avant-gardes の初出例：オランダ・ロドリゲ（サン・シモン派社会主義者・数学者 1795-1851）『芸術家、学者、産業人（Industriel）の対話』1825⇒セザンヌ「サント・ヴィクトワール山」の変容と表象世界の解体

1913 アメリカ・アーモリー・ショーの重要性（モダンアート国際展 Armory Show/New York, Boston, Chicago）：

①ピカソ「マスタード壺と女性」②デュシャン「階段を降りる裸体 no.2」同時に展示・販売

① \$675 ② \$342

第2の反転：人間的芸術から「非人間的」芸術へ（第1次世界大戦とダダイズム以後）⇒意味から「無意味」、表象から反表象へ

アポリネール『キュビズムの画家たち』1913=「芸術家とは非人間的になることを望む人々

である」

⇒ここで「非人間的」とは

「主題（主体）の不在」・「対象との類似の否定」・「新しい自然（機械）の礼賛」を指す。
ダダイズムの出現と無意味の提案＝ツァラ「ダダ宣言1918」DADAは何も意味しない
新しい芸術家は抗議する彼はもう絵を描かず石や木や鉄から直接創作する…⇒チューリッ
ヒ・ダダと偶然の法則＝アルプ「偶然の法則によって配置されたコラージュ」1916

第3の反転・現実から複製・記号、シミュラークルへ（デュシャン「泉」1917＝オリジナル不在のコピー）

デュシャン「泉」事件・1917年4月 New York:

- 1・無審査の独立美術家協会展にデュシャンが R. Mutt の偽名で便器を出品
- 2・理事会が美術品と認めず展示拒否
- 3・デュシャンは理事を辞任、作品引き上げ
- 4・スティーグリッツのギャラリー291に短期間戦争画とともに展示後行方不明（写真だけが残る）
- 5・その後1964に画商がデュシャンの協力でサイン付レプリカを製作（写真のデータに基づく）

⇒実物を見た者はごく少数：「オリジナル」不在の「レプリカ」が現代アートの「傑作」となる（「泉」のシミュラークル性）

ボードリヤール「芸術の陰謀」1997-の射程＝ダダ（デュシャンのレディメイド等）以後、現代アートは「無意味・無内容」の戦略を選択し「美術」を消滅させた。その隠蔽のためにあえて「無意味・無内容だ」と言い張って「難解」を装い、美術市場と結託して「作品」の価格を超高額化、社会から「意味不明だが、隠れた意味や価値がありそうだ」と思わせる巧妙な陰謀を仕組んだのだ。

+ α 天命反転？ 荒川修作：「棺桶」1950年代末～から天命反転地（岐阜県養老町1995-）・天命反転住宅（三鷹市2005-）へ：

天命反転地・住宅は「棺桶」の蓋を開ける手につながる身体をあらゆる常識から解放。モダンアートの「反転」としてアラカワ+ギンズがめざしたのは、遠近法的消失点 (Vanishing point)の否定＝死の乗り越えとしての「天命反転」(Reversible Destiny)の思考実験ではなかったか？その先の社会の「発展」は21世紀の芸術の新たな「反転」をもたらすのだろうか、それとも…？

芸術と社会の新たな「反転」を模索するために：

与えられたもの the given から自由になること（荒川修作）・曲がり角ごとの驚き

La surprise à chaque tournant (Tzara)

SI VOUS VOULEZ ÊTRE GÉNIAL / ARRÊTEZ DE DEMANDER LA PERMISSION (Anonym 1918 Paris)

【発表者プロフィール】

塚原史（つかはら ふみ）1949 年生まれ

早稲田大学法学学術院教授、會津八一記念博物館館長。専攻：表象文化論（消費社会の文化論）、ダダ・シュルレアリスム研究。主要関連著訳書：『ダダイズム』（岩波書店）、『ダダ・シュルレアリスムの時代』（ちくま学芸文庫）、『反逆する美学』（論創社）、『ボードリヤールという生きかた』・『荒川修作の軌跡と奇跡』（NTT 出版）、ツアラ『ムッシュー・アンチピリンの宣言』（光文社古典新訳文庫）、ボードリヤール『消費社会の神話と構造』（紀伊國屋書店 出版部）・『芸術の陰謀』（NTT 出版）他。